

ハン必殺の^{ねはんしやう}涅槃掌に、高々と舞い上げられるアリーナの身体！
しかし、アリーナは全くのノーダメージで、再び地に立った！
彼女は右手でハンの掌の勢いを殺し、さらにその手首を破壊していたのだ！
ついでハンが繰り出した^{たいきよくしやう}太極掌も、アリーナは難なくかわしてしまう。

もはや打つ手がないかに見えたハン　しかし、彼は最後に見いだした。
己の未来、己の知らぬ己。それが唯一、アリーナに勝利しようと！
「一生使うこともあるまい、と思っていた　人を殺すための技だ」

アリーナの腎臓を貫こうと迫るハンの指拳！
しかし、アリーナもまた、それに答えるべく、最大の技を打ち出した！
右拳に気を込め、打ち込む　並ぶ者なき「破壊の王」。
その名は^{ケーニツヒ}王！

「良き戦いで　あった」
その言葉を最後に、^{リング}戦闘台に横たわるハン。アリーナの勝利だ！

＊

この物語は、後に「不屈の^{ハイネス}王女殿下」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ4二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト4・導かれし者たち」第2章より～

第10話　「^{ジェノサイダー}黒衣の虐殺者（前編）」

あさづけ兄貴

ウオオオオオオオ！

まるで大地そのものを揺るがさんとするような、大きな大きなよめきが、王城の向こう
コロシアム
闘技場の方向から聞こえてきた。

エンドール中心部、王城前広場。

「終わったみたいだな」

広場の真ん中に置かれた ^{ブラックボード} 黒板 の前で、^{グレイ} 灰色の作業着のようなつなぎに身を包んだ男が、
ぼそっと、そう言った。

銀色の髪が、まるで何かが爆発したかのように、逆立っている。

彼を囲む数人の見物客の中に、ざわめきが広がる。

^{グレイ} 灰色のつなぎの男。

名を、ケントという。

先ほど、試合開始前に、もうひとりのつなぎの男・ロビンソンと、試合の予想などを絶妙な掛け合いで話しながら、新聞を売っていた、あの男だ。

「もうすぐ相方が帰って来るから、あとはあいつの話を待とうか」

明るい口調で、ケントが見物客にそう言った、その時

そう、まさにその時。

「お、おい、あれ」

見物客のひとりが、ケントの右後ろを指差した。

「ん？」

振り返ったケントが見たもの。

それは、王城の方から、息を切らして、男がひとり走って来る、その光景であった。

「お、来た来た」

走ってきた男。

黒縁のメガネに、無造作にひとくくりに紐で結わえた銀色の長髪。

ケントと同じ^{グレイ}灰色のつなぎの、その左腕に巻かれた、「PRESS」と書かれた腕章。

ケントの相棒、街灯配布新聞「エンドール・ニュース」編集共同責任者・ロビンソン。

先ほどまで闘技場の観客席から試合を見ていたロビンソンは、その結果を一刻でも早く外で待つケントや野次馬たちに知らせるべく、闘技場からこの王城前広場まで、全速力で駆けてきたのである。

「はあ はあ ぜえ ぜえ 」

ブラックボードの前にへたり込むロビンソンに、ケントがねぎらいの言葉をかけた。

「よっ、お疲れさん」

この時。

いつもより心なしかロビンソンの顔が蒼ざめていることに、ケントは気がついた。
激しい運動の後だというのに ？

眉を軽くひそめ、それでもロビンソンの呼吸が整うのを待って、ケントは訊いた。

「で どうだったい？」

「 けた」

聞き取りにくい声で、小さく、ぼそっと、ロビンソンが答えた。

「ん？」

聞き返すケントに、再び小さな声で、しかし今度ははっきりと ロビンソンが告げた。

「負けたよ ハンがな」

＊

「ミスター・ハンが、負けたあ！？」

「サントハイムの王女様が、勝っちゃったってのか！」

「おいおい マジかよ！」

口々に、驚きと同様を口にする見物客たち。

起こるかも知れない、と事前に言ってはいても、実際には起こるはずがない、と心のどこかで思っていた、番狂わせ。

それが、実際に起きた、と言うのだ。

「 一番聞きにくいことを聞くがな」

真面目な顔で、ケントがロビンソンに訊ねる。

「ロビンソン、お前の目から見て 八百長はあったと思うか？」

「！」

見物客たちが、息を呑んだ。

八百長。つまりは「あらかじめ勝敗が決められた戦い」。

真剣勝負における、(そう信じて見ている観客にとっては)最大の不正行為である。

「バカ言うな！」

観客のひとりが、怒鳴り声を上げた。

「あのミスター・ハンが、八百長なんかするわけがねえ！」

「分かってる分かってる、分かってるよ。落ち着けて」

両手を下に「抑えて抑えて」といった感じで数度振り、相手のテンションダウンを促しながら、ケントは言う。

「俺だって、あのミスター・ハンが八百長をやるとは思わないし、思いたくもないさ。

でもな 今回は相手がよその国の王女様だ。それこそ国家レベルの莫大な金が動いた可能性だってある」

「で、でも」

「第一、俺たちや試合を見てないんだ。見てない試合のことでああだこうだ言っても始まらないだろう？」

「そ、そりゃ そうだな」

「だ・か・ら！」

すっかりおとなしくなった見物客に、ケントが強調する。

「この中で唯一試合を実際に見たこいつに、その辺を判断してもらおう、って言うのさ」

ばんばん！ と、ケントがロビンソンの肩を叩いた。

真剣な顔に戻り、ロビンソンの瞳を見やっけて、言う。

「で、どうだったい」

ずれたメガネを直した後、ほんのわずかの間を開けて、ロビンソンが答えた。

「ないな。百パーセント、ない」

おお、と見物客たちが再びどよめく。

ケントは、思わず目を丸くしていた。

客観性を重視するジャーナリストとして、ロビンソンがここまで物事を断言することは珍しいのだ。

「ずいぶん、自信ありそうじゃないか」

ケントに水を向けられ、ロビンソンは、自分の記憶を反芻しながら、ゆっくりと話し始めた。

「ありゃあ 普通無理だ。たとえ八百長だったとしても、普通はできない」

「ん？」

「ケント あのお姫様はな、涅槃掌 を破って、カウンターでハンの手首を折ったよ。俺の目の前でな」

そう言って、まだ蒼ざめた顔で、ロビンソンは軽く微笑んだ。

その言葉の意味を真に理解するまでに、ケントには、数瞬の間が必要だった。

「ちょ、ちょっと待てよロビンソン！ お前、今、すげえ事言ったぞ！？」

ロビンソンからの答えを待たず、ケントは更にたたみかける。

「使ったのか？ ハンが、あの 涅槃掌 を！ 封印を解いたのか！？」

涅槃掌 は人を殺した技。5年前の試合中の事故以来、ハンはその技を封印し、不殺の拳を追い求める 拳聖 となったはずであった。

「涅槃掌 だけじゃない。太極掌 もだ。その前には 無限拳 もあのお姫様は、ミスター・ハンの技を、全部破ったんだよ」

「なんて こった」

ケントが、額に浮かぶ脂汗を、手で拭う。

「それだけじゃあ ない」

追い打ちをかけるように、ロビンソンが言う。

「あのお姫様の突きも、蹴りも ハンのより速く、強かった。空中での回転二段蹴りとか、肘殺しの打撃関節技みたいのも、使ってた」

誰も、それに答える事ができない。

「それに、最後のあれだ」

「あれ？」

「決め技だ。右の ^{ショートフロー}短打 だった 拳が光ってた」

「拳が 」

「光った？」

見物客からの反応に、ケントが答える

「何なのかは分からない。闘気みたいなエネルギーなのかも知れないし、魔法なのかも知

れない。だが

とにかく、その光る拳で、あのお姫様は、ハンを一撃でノックアウトした。それだけは間違いはない」

誰も、何も言えなかった。

もはや「ハンが八百長をしたか否か」について、疑問を持つ者はいなかった。

ロビンソンの話を聞く限り、八百長が介在する余地など、この戦いには存在しない。

いや、それどころか、ハンは、この5年間 否、彼の格闘人生全ての中で、恐らくは最大の力をもって戦ったに違いないのだ。

そして、破れたのだ。格闘家としては全く無名の、サントハイムの王家の娘に。

「分かった」

沈黙を破ったのは、ケントであった。

「お前の話を聞いて、分かったことが2つある」

見物客が再びざわめき始める。

「一つは、八百長なんかやってる場合じゃないような試合だった、ってこと。そして二つめは 」

そこで言葉を切り、再びケントは続けた。

「そのお姫様、とんでもない格闘家だ。間違いなく今回の台風の目になるな」

「同感だな」

実際に試合を見たロビンソンも、同じ気持ちであった。

「さて 」

ロビンソンが、左腕の「PRESS」の腕章を外し、ケントに差し出す。

「取材係は一戦交代の約束だからな。次はお前だ」

「ちえっ、順番逆の方が良かったな そのお姫様の試合、見たかったぜ」

腕章を受け取り、腕につけながら毒づくケント。

「まあそう言うなって。次の試合は栄えある本選第一試合だろ？ 第一ほら 片方が、抽選会に来なかった、例の 」

「デスピサロ、だったか？」

「そうそう」

すっかり、新聞を売る時の掛け合いの口調になっている。この辺の息はぴったり合っている、ということだろう。

「そいつの顔、しっかり拝んできてくれよ」

「了解！ じゃあ、ちょっと行ってくるわ」

逆立った髪を揺らし、ケントは闘技場^{コロシアム}に向けて歩き出した。

その後ろ姿を見送ったロビンソンが、見物客に向かって言う。

「じゃあ、ここからの相手は俺だ。さっきの試合の詳細なレポートと行くか！」

いっせいに、見物客が歓声を上げた。

こうして。

ロビンソンは、世界格闘界の新たな伝説の幕開けを目の当たりにし

一方、ケントは、これから起こる、凄まじい惨劇の生き証人となろうとしていた。

*

「楽しかったー！」

闘技場^{コロシアム}、選手控え室。

椅子に腰を下ろし、満面の笑顔で言うのは、我らが不屈の^{ハイネス}主女殿下、アリーナ・フォン・サントハイムである。

「あのミスター・ハンと、戦っちゃったんだもんな、私」

無理もない。

小さな頃からアリーナの憧れであった、名格闘家ハン。

彼が、最終的には、その力の全てをもって 否、それすらも超えた「彼自身の未来」すらも賭けて、アリーナに立ち向かったのだ。

そのこと自体も、そして、そのハンの魂が、かつて彼女が憧れた彼の物そのものであったことも、アリーナにとっては、心の底から喜ぶべきことであったのだ。

しかし、それを周りから見ている者にとっては

「そりゃあ、姫様は楽しかったかも知れませぬがな」

答える小柄な老人。

頭の真ん中が禿げ上がり、両端に残った白髪が、斜め上に逆立っている。

そして、その白髪と同じ色の口髭と顎髭。

サントハイム聖王国侍従長 というより、凍嵐の魔人 という方が、外国では通りが良いかも知れぬ。

伝説の凍術士^{フリーザー}、ブライである。

彼もまた、今大会では彼女の「付き人」のひとりとして登録されていた。

「傍目からは危ない場面もありましたからな。見ているこちらの寿命が縮みましたぞ」

「何言ってんのよ。貴方^{フライ}なんて、絶対私より長生きするに違いないんだから」
頭や顔の汗をタオルで拭きながら、アリーナが口を尖らせる。

「私は負けないわよ。モニカ姫のことだってあるし だいいち、まだまだ戦いたい人が
たくさんいるのに、こんな所で終わりなんて 」

顔をタオルで隠すように拭きながら、アリーナが言う。
額を拭い終わり、タオルを顔の下半分へ。
タオルの上辺から覗く、自信たっぷりの瞳。

「絶対イヤだもん」
そう言い切る。

ハン戦の前に見せたプレッシャーもどこへやら。
いつものアリーナの、いつも通りの言葉だ。

(やれやれ)

思わず、フライが苦笑する。

(この自信 しかし、それが自惚れでないところが、姫様の凄いところではあるが)

「ところで 」

やおら、アリーナが切り出す。

「クリフト、遅いわね」

「ですな。忘れ物を取りに行くだけにしては、ずいぶん掛かっておるような」

クリフトは、試合終了直後、「部屋に忘れ物を取りに行く」と言い残して、王城へと向
かったのである。

「何かしらね 『忘れ物』 って」

「さて 」

それと、ほぼ同時だった。

「すみません、遅くなりました」

扉が開くと同時に、控え室に、若い男の声が響いた。

深い青の髪を耳の半分隠れる高さに切り揃えた、真面目そうな青年。
その青の下に、身を包む神官服の明るい緑。

サントハイム聖教会の次代のホープ。
アリーナ付き神官、クリフトである。

右手に、銀色の口金の付いた、小振りの黒い鞆を提げている。
アリーナは、それが、いつもクリフトが「非常用鞆」と呼んでいる物である事に気がつ
いた。

呪文が尽きた時などの非常時のために、薬草や毒消し草など、簡単な治療を行うための
物品を入れた、いわば「救急箱」のようなものだ、と、クリフトが前に説明していたのを
彼女は思い出した。

これが、先ほど話していた「忘れ物」だったのであろうか。

「遅ーい！」

「随分かかったのう。何をしとったんじゃ」

アリーナが、再び口を尖らせた。ブライも、ここぞとばかりに突っ込む。

「申し訳ありません。なかなか規則に沿ったものが手に入らなくて」

「？」

言っていることがよく分からない、という表情のアリーナを前に、クリフトは、椅子に
置いた鞆から、小さな短冊状の白い厚手の布と、小さな蓋の付いた杯のような物を取り出
した。

そのまま、杯の蓋を開け、近くにいた兵士に、中身を見せる。

「薬草など、治療効果のあるものは使っていません。粘着力のある軟膏ザルベのようなものです」

兵士は、杯をクリフトの手から取り、まじまじと見たり、匂いを嗅いだりしている。

「これを布に塗って、それを傷口に貼って覆います。傷をかばうための『鎧』の一種だど
お考え下さい」

兵士は、クリフトの話を知ると、うなずいた。

「いいだろう。規則に適合すると認める」

「ありがとうございます。　　だそうですよ、姫様」

こちらを向いて、微笑みを見せるクリフト。

しかし、依然として話が見えないアリーナには、それが面白くない。

「だから、さっきから何言ってるのか全然分かんないってば！」

「あ、そうか　　すみません、説明してませんでしたね」

クリフトは、ぼりぼりと頭をかくと（彼の癖なのだ）、すたすたとアリーナの元へ歩み

寄る。

そして、アリーナの左頬を、人差し指で軽くつついた。

「きゃっ!？」

アリーナが思わず声を上げる。

驚きや照れなどではない。

痛みだった。

クリフトのつついた場所は、ハンとの戦いのさなか、掌打から変化した拳打によりつけられた傷口だったのだ。

「傷を塞ぐのに、ここに当てる絆創膏を持ってこようと思ってたんですが あいにく、傷の治りが良いように、薬草の絞り汁の入ったものしか無かったもので」

「えっ？」

アリーナが、疑問を挟む。

「傷の治りが良いと ダメなの？」

「そうじゃなくて。反則負けになってしまいますよ」

クリフトの指摘に、アリーナの目が点になる。

「あ そか」

このエンドール武術大会には、いくつかのルールがある。

その中でも、最も厳しいものが、

「傷の治療の手段は、大会開始時に配布した薬草、あるいは己の回復呪文のみとする。

それ以外を用いたり、他者から治療の手段を提供、もしくは直接治療行為を受けた者は、その場で失格とする」

という一文であった。

言うまでもなく、クリフトが手持ちの薬草入り絆創膏を使えなかったのは、この一文に抵触するからである。

もっとも、他者がついうっかり回復魔法をかけてしまう、などという状況も考えられる。そこで、この大会期間中は、闘技場内の、^{コロシアム} 闘技場内の、^{リング} 戦闘台の上を除く全ての場所に、強い魔法結界が張られ、呪文が封じられているのだ。

これで、控え室における他者の回復呪文の行使のみならず、例えば試合中に、客席から選手に向かって魔法を使う、あるいはセコンドに付いたものが魔法を使う、などという事態も防止できることになる。

「教会まで行って、絆創膏を作る前の、ねばつく糊料^{ペースト}だけを、無理を言っていたいで来ました。運営側のお墨付きも出たし、これで即席の絆創膏を作ります」

喋りながら、クリフトは、先ほど取り出した軟膏を、スプーンのようなものでかき混ぜ、短冊状の布の上に塗ってゆく。

先ほどの兵士　運営側のスタッフなのだろう。
じっと、その様子を観察している。

「回復魔法が使えないような、こういう時のためにこの鞆があるのですが、さすがに葉草さえ使えないというのは想定外でした　と。よし、できた」

どうやら、絆創膏が完成したようである。

「姫様、お顔を」

「ん」

クリフトに促され、アリーナがクリフトに、ずいっと顔を近づける。

アリーナの顔のアップが、クリフトの視界のすべてを占領する。

きめ細やかな肌。

明るさの奥に強い意志を湛えた、赤茶色の瞳。

すっと通った鼻筋。

小振りな桜色の唇。

クリフトの頬が、赤くなる。

目線が、下に逸れる。

「？　どしたの？」

もちろん、アリーナには悪気などない。いや、だからこそ余計に始末が悪い。

「い、いや、そうじゃなくて姫様　あの、傷口を　」

「あ、そか。ごめんごめん」

やはり悪気なく笑うと、アリーナはすっと顔を右に向けた。

あらわになる。

白い頬に、一条の赤い傷。

クリフトの心が、ちくっと痛む。

たとえ、それが戦いの勲章だとしても。

その赤は、クリフトの心に突き刺さるのだった。

(姫様)

しかし、手の方は休めない。

左手で傷の周囲を軽くつまみ、傷を寄せると、その上に先ほどの絆創膏を乗せる。

「ちょっと失礼」

絆創膏の上を右手でひと撫で。肌になじませた後、左手を離す。

「はい、終わり。 姫様も女性なんですから、もっとお顔を大事になさって下さいね」

傷の赤は、今や白い絆創膏で被われている。

ただ傷を覆い、^{かば}庇うだけのものではない絆創膏は、しかし、もともと色白のアリーナの肌となじみ、少なくとも傷の生々しさだけは、完全に消していた。

「はいはい」

気のない返事をしながら、アリーナも、絆創膏の上から傷に手を触れてみる。

傷は、痛まない。

「ん、よし！」

生気に満ちた声。そしてその表情。

優しい瞳でその様子を見ていたクリフトが、直後、真剣な顔で視線を横に。

先ほどの兵士に、目で合図を送る。

兵士は、ただ、うなずいた。

クリフトの一連の行為には違反がなかった、という意味である。

再び、クリフトの表情が緩む。

「では姫様、今のところはこれで 『恩寵の夜』 になったら、ホイミで治療して差し上げますから」

実は。

先ほどご紹介した規則には、唯一の、しかし非常に重要な「例外規定」がある。

それが、たった今クリフトが口にした「恩寵の夜」だ。

具体的には、二日間にわたって行われる大会の、一日目の最後の試合が終了してから、

翌日の試合が始まるまでの間、その時点で勝ち残っている選手には、傷や怪我の治療に関する「全ての制限」が外される。

つまり、一日目の試合を勝ち残った選手は全員、完全に回復した状態で二日目を迎えることが可能になるわけだ。

もっとも、闘技場^{コロシアム}にかかった魔法封じの結界は、夜の間も解かれない。治療するならば外で、ということになる。

この「例外規定」、選手にとっては大きな助けになるとともに、観客にとっても、一日目最後の試合が非常に盛り上がる（翌日のことを考えずに全力で戦えるから）、二日目以降も元気な選手が見られる、と良い事づくめである。

「恩寵の夜」と呼ばれるこの例外規定は、よって観客と選手双方に支持され、長い間、伝統として受け継がれてきたのだ。

*

「さて、そろそろ本選の開会式も終わった頃ですかね」

ブライがつぶやく。

アリーナが戦った試合は、今回の武術大会の「特別予選」。

武術大会が始まる、その前の段階である。

つまり、驚くべきことに、あれだけの熱戦が既に繰り広げられたにもかかわらず、正式には、武術大会自体はまだ始まっていなかったということになる。

今、闘技場^{コロシアム}で行われている開会式。

これが終われば、いよいよ、第35回エンドール国王杯争奪武術大会、その正式の幕が上がるのだ。

「それでは、もうすぐ最初の試合が」

と、クリフトが言いかけて止まる。

アリーナ。ブライ。クリフト。

三人はこの瞬間、全く同一の人物のことを考えていたのだ。

「デスピサロ」

アリーナが、口に出す。

最初に行われる、Aブロック第一試合。

この試合で戦う二人の選手のうちのひとりの名だ。

組み合わせ抽選会に姿を見せぬ大胆不敵さ。

その素性も、使う技も 全てが謎に包まれた選手である。

『私だったら、何があっても抽選会は休まない。休むのは、本当にその辺を分かってない、よっぽどのおバカさんが、そうじゃなければ 抽選会なんかいらないうらい、誰と当たっても絶対に負けないぐらいに、めっちゃくちゃに強いかな。どっちかね』

抽選会の最中、デスピサロの欠席に関して、アリーナが語った言葉である。

そしてその時、ブライもまた独自に、推理を展開していた。

組み合わせの如何、そしてそれを知っているか否かなど、全く問題にならない

そんな状況があり得るとしたら、二つに一つ。彼が必ず勝つことになっているか、あるいは彼が必ず勝つと確信しているか、そのどちらかだと。

前者は、王の性格、そしてアリーナ対ハンの試合を見た時の反応などからして、可能性は薄い。ならば後者

アリーナもブライも、それぞれ独自に、デスピサロの強さが並々ならぬものである可能性に気がついていたのだ。

「とにかく、あまりに素性が分かりませぬ。今後のためにも、この試合、決して見逃すべきではありませんな」

状況的には、全くブライの言う通りであった。

そして、幸運なことに、恐らくアリーナ対ハンの試合同様、王とモニカは、ブライとクリフトに解説役を依頼するだろう。そしてその時は、当然アリーナも同行できるはずだ。

そのデスピサロとはいかなる選手なのか、特等席で、じっくり見定められるのは間違いない。

しかし

その「幸運」は、アリーナの思いもかけぬ一言により、覆された！

「私、試合は見ない。ここにいるわ」

彼女は、はっきり、そう言ったのだ。

「！？」

「姫様？」

驚くブライとクリフト。

「姫様、一体何ゆえに」

と、訊ねかけて 声が、一段低くなる。

「もしや、いつもの、勘 ですか」

「うん そんな気がするの」

少し沈んだ声で、アリーナが答えた。

アリーナの「勘」は、よく当たる。

正確には、本当に大事な局面での「勘」が、アリーナは極度に鋭いのだ。

魔道王国サントハイム。

開祖、大聖王クリスティアンより連なる王家の血筋は、本来、強大な魔力を有している。

クリスティアン自身も魔道士であったし、代々の王も、魔道に長けていた。

アリーナの父、現王ベルンハルトも例外ではない。その上彼は、「予知夢」という、夢で未来の事象を予知する能力を備えていた。

一方、クリスティアンの末裔でありながら、運命の悪戯か、あるいはあまりに低確率の偶然か、全く魔力を持たずに生まれた、アリーナ・フォン・サントハイム。

しかし、彼女は唯一、父ベルンハルトの「予知」の力の一部を、「鋭い勘」として受け継いでいたのだ。

だからこそ、重要な局面におけるアリーナの勘はよく当たるし、それをブライもクリフトも認識していた。

「姫様の勘がそう告げておるのなら、その方が良いでしょう 試合は、儂とクリフトで見て参りますじゃ」

「待って！」

立ち去ろうとするブライに、またアリーナが叫ぶ。

「クリフトも 私と一緒に、ここにいて」

「わ、私もですか？」

今度はクリフトが驚く。

「クリフトも それも勘ですか、姫様」

「 わかんない」

ブライの問いに、アリーナはかぶりを振る。

「でも、クリフトも一緒にいなきゃダメだって　いや、むしろ私よりもクリフトの方が、ここにいなきゃダメだって　」

自分でも理解できない感情に動かされ、アリーナは言う。

「ふむ」

顎髭を撫でるブライ。

しばしの思案の末、彼はクリフトの方を向き直り、言った。

「クリフト、姫様がああ仰せじゃ。ぬしはここに残れ」

「え？」

クリフトは、アリーナの真剣な瞳と、ブライの、これも真剣な瞳をきょろきょろと見比べた。

そして、小さな溜め息をひとつ付くと、こちらも真剣な顔で、アリーナに訊ねた。

「姫様、一体何が起こるって言うんですか」

「わかんない　だけど」

ここにいて。

そう、アリーナが言う前に。

「分かりました」

クリフトの瞳が、優しく変わる。

「何が起こるか分からないけれど、何かは起こる　姫様の勘ですからね。当たりますよ」

そう言って、再びブライの方に向き直る。

「私は姫様の御意のままに。デスピサロの方はお願いします」

「うむ」

ブライはそう言うと、きびすを返し、歩き出した。

「迎えを待つのも癪^{しゃく}じゃ。こちらから出向くとしようかの」

扉を開け、出てゆく。

重い軋^{きし}みが、部屋に響いた。

＊

クリフトが、そばにいてくれる。

アリーナが、再び、顔の絆創膏に触れる。

(姫様も女性なんですから、もっとお顔を大事になさって下さいね)

クリフトの言葉を、心の中で反芻する。

もちろん、顔の傷を気にしては、格闘などできるはずはない。
しかし、このクリフトの気遣いが、またアリーナにとっては、嬉しかった。

やはり、傷は痛まない。

クリフトが、護ってくれているんだ
そんな風に、アリーナには思えた。

「クリフト」

アリーナが、傍らに残った自分付きの神官に、呼びかける。

「はい」

「　　ありがとう」

視線を合わさずに、感謝の言葉。

「どういたしまして」

いつものスマイルとともに、クリフトが返す。

結論から言って。

アリーナの勘と、クリフトの選択は、まったく正しかった。

アリーナとクリフトが、特に（アリーナの言う通り）クリフトがこの場にいたことにより、この直後に起きる「ある事態」が無事解決されるのである。

そして、そのみならず、実は、結果的にはそのことが、後々この世界を救う、その一助と（大げさでなく、その通りの意味で）なるのである。

そう思うと、今この瞬間こそが、世界を救うべき正しい選択がなされた瞬間なのである。
もちろん、当人たちに、その自覚はあるはずがないが　　。

＊

エンドール王室専用控え室。

「おお、ブライ殿！ 待ちかねたぞ！」

エンドール王・オーギュストは、本当に「待ちかねた」と顔に書いてあるような、嬉しそうな表情で、ブライを出迎えた。

「やはり、武術大会は、よく武術を知る者のそばで見るに限るな」
などと、お気楽なことを言う。

(こっちの苦労も知らんで、よく言いおる)

などと、ブライが心の中で毒づいていると、王の傍らのモニカが言った。
「あの アリーナ姫様とクリフト様が、お見えにならないようですが 」
「恐れながら」

表情を変えずに、ブライが答えた。
「姫様におかれましては、先のミスター・ハンとの戦いの疲れがいまだ抜けぬご様子
次の試合もありますし、大事を取って、控え室にて休息していただいております。御一人
では何かと不便もありましようから、クリフトを付き添わせております」

こんなところで真実を言う必要はない。「アリーナの勘」という、ある種の「武器」の
存在は、伏せておいた方がいい

そんな判断から出た、ブライの嘘である。
しかし、オーギュスト王は、それを信じてしまったようだ。
「おお、そうであったか 」

わずかに、目線を上へ向ける。恐らく、先ほどの戦いを回想しているのであろう。
「残念だが、しかたあるまい。凄まじい戦いだっただものな」

「まさか、どこかお怪我なさっていらっしゃるとか？」

真剣な顔で詰め寄るモニカに内心たじたじになりながら、それでもいつも通りの口調で、
ブライは答えた。

「顔に傷がひとつ これは、薬草のっていない、大会規則に違反しない絆創膏を作っ
て、それで押さえております。あとは目立った傷や怪我はごさいませぬ」

「お顔に 傷が 」
生傷が絶えぬアリーナと違い、モニカにとって、それはあまりにつらいことなのであ
ろう。

両手で、蒼白になった顔を覆う。

瞳から、涙がこぼれる。

「あ、いや、モニカ姫様。姫様は旅の途中でも何度も傷を負っておりますれば それに、
大会が終われば いや、勝ち進めば、今夜、『恩寵の夜』で回復できますからの」

「そう ですわね」

モニカは、涙をぬぐった。

顔の傷を気にしないアリーナも問題だが、モニカ姫のこれもまた、過剰反応過ぎるような気が、ブライにはした。

もっとも、王家の娘としては、これぐらいでちょうど良いのかも知れぬが。

「しかし、あの戦いで、顔以外は無傷とは 誠に、アリーナ姫は素晴らしい武術家であるな」

「恐れ入ります」

ブライが頭を下げる。

自分が付き従う人物を褒められるのは、ブライとて悪い気はしない。

*

その時。

短く、二度、ノックの音が鳴った。

「何か」

王が答える。

「第一試合、開始五分前であります」

男の声だ。王たちを迎えに来た兵士であろう。

「ご苦労。今参る」

王は短く返事をし、立ち上がると、自ら部屋のドアを開けた。

「行くぞモニカ。ブライ殿も」

二人を促す。

部屋の外では、兵士が直立不動のまま、敬礼の姿勢で王たちを待っていた。昨日から何度も見た光景。

王は、無言で軽く右手を上げる。

それを合図に、兵士はきびすを返し、歩き出した。

「ひとつ、よろしいかの」

道すがら、ブライが突然、兵士に訊ねた

「はっ。何でありましょうか」

「第一試合 選手は揃いましたかな」

思わず、王がブライの顔を見る。

この試合には、抽選会に顔を見せなかったデスピサロが出る。
それを思い出したからだ。

「はっ　それが　」

「揃っておらぬのですな」

「グライア殿は既に戦闘台^{リંગ}に上がっております。ですが　」

「デスピサロが来ておらぬと」

「は、はい　」

まだ世間擦れしていなさそうな顔の若い兵士は、すっかり困り顔である。

「いや、別にお主を責めておるわけではない」

なだめるブライの声は、しかし、強い調子の声にかき消された。

「規則通り。三十分までの遅延は認める。それを過ぎたら負けだ」

オーギュスト王の声だった。

王はやや足早に、すたすたと廊下を歩いてゆく。

見る人が見れば、なにかに腹を立てているようにも見えたであろう。

実際、王は腹を立てていた。

デスピサロの遅刻に、ではない。

強いて言えば、自分に。

これから始まろうとする試合、デスピサロという選手。それらに対する漠然とした不安を打ち消せぬ自分に、である。

＊

選手控え室。

戦闘台^{リંગ}に続く廊下側から、兵士が一人入って来ると、大声で呼びかけた。

「デスピサロ選手！ デスピサロ選手はおらんか！」

「まだ来てないの？」

「そうみたいですね」

一見のんびりとした、アリーナとクリフトの会話である。

「何考えてるのかしらね」

「私に分かるわけがないじゃないですか、そんなこと」

*

王室廊下の出口近く。
光の向こうに、戦闘^シ台が見える。
その上に 一人の男が立っていた。

190センチはあろうか。かなりの長身、というより、ひよろ長い身体。
こけた頬に、鋭い目つき。
短く刈り揃えた金髪^シの頭を、深緑色のヘッドギアが覆っている。
同じ色のシャツの上に鎖帷子^{くまりかたびら}を着込み、下半身は茶色の長ズボン。

その右手には、小さな鎌。
そして、その柄につながった鎖の、先端の分銅を、左手に持っている。

鎖鎌の使い手、ブランカのグライア。
鎌と鎖分銅とを自在に操り、相手の間合いの外から体を絡め取り、躊躇なく首を掻き切り、殺す。

その戦闘スタイルと残忍さゆえ、「螳螂^{マンティス}」の異名を取る武術家である。

彼が、Aブロック第一試合に出場する、もう一人の選手。
件のデスピサロの、その相手である。

「まだか！ まだなのかよ、俺の相手は！」

螳螂^{マンティス}は叫んでいる。
相当、頭に血が上っていると見えた。

「かなり、怒っているようだな」

ロイヤルボックス^{ロイヤルボックス}に腰掛けながら、王が言う。

「あるいはそれを狙ったか、この遅刻もまた、作戦のうちなのかも ン？」

ブライが、何かに気がついたらしい。

「どうされた？」

「魔力が 」

「魔力？」

観客の中にも、何人か、それに気がついたようだ。

バチバチッ、というかすかな音と共に、戦闘台^{ユング}の上空に、青白い稲妻のようなスパークが、幾条か発生したのだ。

「魔力が 強い魔力が集まっておる これは？」

「な、なんだあ こいつあ！？」

戦闘台^{ユング}上のグライアも、啞然とした表情で、それを見上げている。

直後、スパークの中に、黒い筋のようなものが現われ それがだんだんと太く、丸く空間にぽっかりと空いた「穴」のような物となった。

「空間の裂け目じゃとっ！？」

「ワーム ホール？」

ブライの叫びの中の、聞き慣れぬ言葉に、思わず王が問い返す。

「瞬間移動呪文^ルですじゃ。瞬間移動呪文^ルを行使する時に現われる、空間と空間とをつなぐ穴」

そして、その漆黒の穴から、何かが戦闘台^{ユング}の上に落ちてきた。
いや、人だ。

人が 若い男が、空中の穴から、戦闘台^{ユング}に飛び降りたのだ！

*

片ひざを付いた姿勢で、頭を下に向けたまま、男は動かない。
体から、幾筋か、煙が上がっている。

その姿勢のまま、男は低い声でつぶやく。

「エンドールの結界 人間にしてはなかなかやるものだ」

そして、男は立ち上がった！

流れるような白銀の長髪。

それを、血のような深い赤の細布でまとめている。

それと同じ色の、赤い、赤い

怒りと憎しみに燃える、昏い炎^{クハ}のような 深い赤の瞳。

グライアに並ぶほどの長身だが、均整のとれた身体。
その身体を、漆黒の^{クロスアーマー}布鎧が覆い、さらにそれを黒いマントが包んでいる。
はだけた胸に、人の^{どくろ}髑髏を模した、銀の大きな首飾り。
左肩に、大きな銀色の^{スパイク}棘甲。
腰からは、やはり血の色の布。
左腰に、黒塗りの鞘に収まった大剣。

血と、闇と、鋼の色。
それが、人の形を成していた。

「あれが　　」
「デスピサロ　　」
「のようすな」

王の、モニカの問いに、ブライは簡潔に答える。
内心、別のことを考えながら。

(この^{コロシアム}闘技場には魔法封じの結界が張ってあるはず。それを越えて、^{リング}戦闘台に直接入ってきたというのか　あの男は)

もし、ブライの考えが事実なら、彼の魔力は、このエンドールの結界をも物ともしないほど強大である、ということになる。

そしてそれは、事実であったのだ。

★

「な　　」
思わず後ずさりするグライア。

「お前が、私の相手か」
同じく低い声で、男は言った。

「お、遅えじゃねえか。あ、あんまり遅いから、逃げたのかと思ったぜ」
デスピサロの問いを無視し、挑発するグライアであったが、こちらも内心は穏やかでな

かった。

(何だ、この闘気は こいつは やべえ)

相手の中に潜む危険さを嗅ぎつける能力は、さすがに武術家のそれである。

だが、デスピサロはそれに答えない。そして言う。

「お前がこのデスピサロの相手なのか、と訊いている」

表情は、変わらない。

「そ、そうだ。お、俺がお前の相手、『^{マンティス}蠅螂』のグライアだ」
少し裏返った声で、答える。

デスピサロは、目線を落とした。

口元に、シニカルな笑みを浮かべる。

「何が『楽しめる』だ かつがれたか。エビルめ」

目線を上げ、グライアを睨みつける。そして言った。

「人間。お前では話にならぬ」

「な、何だとお？」

色めき立つグライア。だが、しかし

目前の男。

今まで戦ってきた相手とは、明らかにレベルが違う。

本当に「自分では話にならない」かも知れない、とさえ思える。

背中に、冷たい冷や汗が流れていくのを感じる。

(確かに、こいつぁ強そうだ。かなわないかも知れん となれば)

彼は、悪知恵をフルに働かせ、言った。

「まあ、確かにあんたは強そうだ。じゃあどうだい。俺だけじゃなく、他の選手も一緒に相手する、ってのは」

「他の選手も 一緒に？」

デスピサロの目が、細まる。

「要するに、俺と何人かが組になってあんたと戦う。あんたは俺らを全員倒せばいい
どうだい？」

しばらくの、間。

「十六人」

デスピサロが、ぼそっと言った。

「ん？」

「私を含めて十六人だ。それでこのAブロックの全員のはずだが」

「十六人で戦う、ってのか？」

「三十二人全員と戦っても良いのだが 別ブロックの決勝に残るほどの腕の者ならば、
一対一でも少しは楽しめよう。その者は残しておいてやる」

あまりに傲岸不遜な発言に、さすがにグライアも訝しげに念を押す。

「十六人って 十五対一だぞ？」

「そのぐらいでなければ、楽しめそうにない。お前のような者ばかりではな」

(くっ、何てえ自信だ だが、その自信が命取りになるぜ！)

グライアは、己の勝ちを確信した。

「だとよ、王様！」

王に向け、グライアは呼びかけた。

「十五対一でもいいってよ！ どうする？」

「陛下」

「お父様」

ブライと、モニカの見つめる中、大会委員長でもあるエンドール王オーギュストは、非常に難しい判断を強いられていた。

(どうする 十五人が一人をよってたかって、というのは、この大会の趣旨に反するかも知れぬが)

オーギュストもまた、かつては自ら軍を率い、戦を行ったことのある男である。戦う者の力量が全く読めぬわけではなかった。

そして、それ故に、彼もまた、デスピサロに、他の武術家とは違う「危険さ」を感じていたのだ。

(強すぎる。この大会自体をひっくり返すほどに 。十五対一ならば、あるいは)

そして、王は立ち上がり、言った。

「認めよう」

おお、と会場全体がどよめく。

「^{リッソグ}戦闘台に十六人が上がる。デスピサロ選手が倒れればその時点で試合は終了、他に終了の条件は無し。構わぬな、デスピサロ選手」

王が^{リッソグ}戦闘台に向かって叫ぶ。

「好きにするがいい」

表情を変えず、デスピサロは答える。

王は矢継ぎ早に、近くの兵士に命じる。

「Aブロックの選手を全員招集せよ。至急だ」

「はっ 全員 でありますか？」

「やつの気が変わらぬうちに！ 急げ！」

「は、はっ！」

珍しく声を荒らげた王の剣幕に、兵士が驚き、慌てて駆けてゆく。

「これで良い 良いはずだ これで 」

自分に言い聞かせるように、何度も繰り返す王。

ここに、史上例を見ぬ、一対十五の変則マッチが実現することになってしまったのである。

しかし、それはまた同時に、大会としてのバランスを崩し、同時に、ひとりの選手を極度に恐れる運営側の弱腰を露呈した、ということでもあった。

(大会のバランスを欠いてなお、あの男を潰しにかかるか ^{デスピサロ})

今までの「狸」にたとえられた老獪さが、今のオーギュスト王からは感じられない。

相当、焦っているのだ、とブライは思った。

(確かにあの男、強い 策としては正しいのかも知れぬ。が)

^{リッソグ}戦闘台上の、切れるような気を発する、銀髪の男。

彼を見上げながら、ブライは、内心に、言い知れぬざわめきを感じていた。

(何じゃ この胸騒ぎは)

(へへ いい風向きになってきやがった)

グライアは、内心ほくそ笑んだ。

目前の強敵を葬るための、卑劣な策 しかしこれが、逆に彼らに悲劇をもたらすことになるなど、彼はその時、思いもしなかったのだ。

そして、もうひとり。

(ククク それでいい それでいいのだ)

観客席の中段。

白と緑の僧服に身を包んだ、大柄な男。

深い皺の刻まれた顔は、老人のそれ。しかし、それにしてはエネルギーに満ちた、ギラギラした目。

恐らくは名のある高僧に違いない、と、周囲の観客は思ったかも知れない。

しかし、彼は

彼こそは、^{リング}戦闘台上のデスピサロの正体を知る唯一の男。

幾百万に及ぶ怪物を操る魔界の軍師。

数々の暗黒魔法を駆使する、力ある邪神の僕。

そして、若き魔族の指導者・デスピサロに永遠の忠誠を誓った男。

その本当の名を知る者は、誰もいない。

彼を知る者は皆、彼をこう呼ぶ。

「^{エビルプリースト}邪神官」と。

(ピサロ様にああ言った手前、少しでも楽しんでいただかなくてはな
さあ、あがいて見せろ人間共。そしてピサロ様にひとときの愉楽を！)

★

選手控え室に、兵士が数人、どやどやと入り込んできた。

「Aブロックの選手は、全員出ませい！本試合は、十六人による変則マッチとなった！」

兵士の叫びに、控え室内に動揺が走る！

「な、何だって！」

「どういうことだ！」

「デスピサロ選手が倒れた時点で試合は終わる。いわば一対十五の戦いである」

詰め寄る選手たちに、兵士が説明する。

「要するに、そのデスピサロってのを倒しゃいい、ってわけだな？」

そう言ったのは、筋肉質の大柄な男である。

顔中が、黒い髭で被われていた。

白いシャツと、膝までの白いズボン。

両手の^{ガントレット}手甲と左胸の^{チェストガード}胸鎧以外には、鎧らしい鎧は付けていない。

右手に持った鋼の長い^{ロッド}棍を杖代わりに、体重を預け、立っている。

^{マッシュロッド}破碎棍 マクダニエル。

抽選会が始まる前、出場者名簿の「特別招待選手、その正体は秘密」との記述に、「エンドール王は俺達を馬鹿にしているのか」と怒りをあらわにした男。

そして、抽選会で、王にそのことを問いただした男。

読者諸氏も、覚えておいでのことと思う。

彼が抽選会で引き当てたのは、Aの6番。

すなわち、彼もこれから、デスピサロと戦う羽目となったのだ。

「俺は行くぜ。とっとと終わらせようや」

言うと、鋼棍をひょい、と持ち上げ、それで自分の肩をとんとんと叩きながら、^闘戦闘台へ向かう通路へと、消えて行った。

他のAブロックの選手も、それに続く。

Bブロックの選手（の一部）のみが残り、妙にがらんとした控え室の中で、クリフトは、先ほどと全く同じ質問を、口に出した。

「姫様 一体何が起こるって言うんですか」

「わからない。だけど」

アリーナの答えも、そこまでは先ほどと全く同じだった。だが

次の一言が、今回の自体を最も簡潔に、そして最も正確に、言い表していた。

「きっと、悪いことだわ」

(つづく)

< 次回予告 >

前代未聞の、十五対一のハンディキャップマッチが幕を開ける！
が、そこで繰り広げられたのは、もはや試合ではなく

選手たちの、そして観客の悲鳴と怒号が響く中、その「悲劇」は起こった　　！

「不屈の^{ハイネス}主女殿下」第 11 話　「黒衣の^{ジェノサイダー}虐殺者（後編）」

人の命を「刈り取る」者。其は^そ悪魔か、それとも死神か
